

田中善信著

「芭蕉—俳聖の実像を探る」

佐藤 信 一

田中善信先生による芭蕉の伝記である。しかし、ただの伝記ではない。多くの俳人たちから俳聖として崇められ、神格化されるに至る芭蕉の実像に迫ろうとするものである。目次を掲げておく。

はじめに

I 故郷在住時代

1 生家を考える

2 武家奉公

3 俳諧とかかわる

II 日本橋在住時代

1 芭蕉と小沢家

2 俳諧師桃青

3 挫折

III 晩年の生き方

1 仏頂との出会い

2 無一物の生涯

3 宗教に対する懷疑

4 状況の急変

おわりに

芭蕉というと旅に生きた行者の如き俳諧師と言った側面に目が行きがちだが、田中先生の視線は別の方向を向いている。まず最初に、芭蕉の身分を武士ではなく領民と規定し、様々な傍証から、郷士と呼ばれる特別な資格を持つ農民であったことを明らかにしている。芭蕉の前歴として料理人であったことや、芭蕉は、藤堂良忠の伽として選ばれ、良忠に仕え、伽の役目を終えてからも、武家奉公人として仕えていたとされ、同郷人が郷士の偉人である芭蕉の名声に反することは一切書き残さなかったことから、芭蕉の経歴は曖昧なままであるとする。また芭蕉の俳諧師匠としての教養は良忠の伽をしたことで身についたものであったとする指摘や、良忠とその学問の師である北村季吟との文通の仲立ちをした使者として芭蕉を捉える観点は興味深いと思う。

江戸に出た芭蕉の身元引受人として小沢太郎兵衛の果たした役割が大きかったとして、書き役、文書の草案の作成や業務の記録に従事した者、として小沢家に雇われたとする。つまり、芭蕉は、小沢家の書き役として、数町にわたって名主の代行をしていたのである。しかし、芭蕉は深川に移住して俳諧師という職業を放棄し、小沢家によって支えられていた生活の手段さえも放擲してしまった。その原因として芭蕉の甥の桃印と、芭蕉の内縁の妻であった寿貞との不義密通の可能性が指摘されている。

また、近世初期に韻文の分野で、俳諧という新しいジャンルの文学が誕生したとされ、言葉の遊びを楽しむ滑稽文学として

貞門俳諧が流行していたが、芭蕉が開いた蕉風俳諧は、それに携わった人々の教養のレベルの点で、貞門俳諧より低くなつたとされる。貞門俳諧の方が、作品を作る際の規範となる故事を重視していたとする。芭蕉の教養は、仕えていた良忠の連歌をたしなむ際の不可欠な知識であつた、古典文学の教養に基づくものであつたのである。その頃、宗因の軽妙な俳諧の作品が談林俳諧として流行した。そこでは「故事を多く知つてゐることよりも、面白い発想をすることが指導者の重要な条件」(63頁)であつたとされる。そして談林俳諧によつて培われた芭蕉のユームアのセンスを重視される。また、無名の頃から芭蕉には放蕩無類の不良青年を受け入れる雰囲気があつたことを指摘する。ところが、延宝八年に芭蕉は、当時開発途上の地域であつた深川に移住して、俳諧師という職業を自ら放棄してしまう。その原因を田中先生は、芭蕉の甥の桃印と、芭蕉の内縁の妻であつた寿貞との不義密通であつたとする。寿貞を「妾」とする史料が存在することから、「妾」の当時の用法を検討され、今日の愛人であると結論づけ、芭蕉の内縁の妻であつたと結論づける。田中先生は「延宝八年に、桃印が寿貞を連れて行方をくぐりましたのだ」(87頁)として、帰国しなければならぬ桃印を死んだことにして芭蕉が当面の危機を乗り切らうとしたとする。不都合な噂を封じるために芭蕉は敢えて深川に移住したと推測する。

さらに、深川に移住した芭蕉に影響を及ぼした師として、常陸国鹿島の根本寺住職であつた仏頂の存在を重要視している。仏頂は著名な人物ではないが、禅宗の僧侶である以上、漢詩漢

文の教養もあつたことから、芭蕉に禅や漢籍を学ばせたのであろうと推測する。とりわけ、仏頂が禅宗の、いわば補助教材として「莊子」を教えたとする。禅宗や「莊子」の「無」の概念から「求めない」ということを生活の信条にしており、「俳諧を生活の手段にすることがなかつた」(115頁)とする。支考などが芭蕉の教えを説いて廻つたのは、芭蕉の人柄に心酔してゐたのであつて、芭蕉の俳諧はその人柄と不可分の関係にあつたと結論づける。芭蕉を偶像化するよりも、実像と対峙する必要があるとされる。

以上、粗雑な要約に終始したが、全体を通して立ち現れてくるのは、田中先生の、神格化を廃して芭蕉の実像に迫らうとする姿勢である。田中先生によつて「俳聖」という虚飾から解放された芭蕉の息遣いが、行間から感じられた思いがした。

(二〇〇八年八月一日、新書版、一二七頁、新典社刊)